

# 本を選ぶ

NO.426 2020年(令和2年)11月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央 5-20-1 TEL=048-432-3726

●<ろん・ぼわん>蒟蒻版

●司書の眼 第42回

●大学教員ノート 第4回

●なぜ「BLの教科書」が要るのか？

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

## こんにやく 蒟蒻版

探していた古い新書が手許で見つからず、買い直した。半世紀以上も前に出版されたとは言え、奥付を見ればなんと73刷。2年毎に3刷のペースで刷を重ねてきた立派な歴史に改めて気付き、敬服するばかり。

再読し始めて目を止めたのがその版面<sup>ほんづら</sup>だった。文字が全体にのっぺりと濃い印象。印刷をじっくり見てみると、旧来の紙型<sup>しけい</sup>から起こした版ではなさそう。活版印刷ではなく、オフセット印刷に間違いはない。だが書体は旧来の活版活字のようだ。だから、版本をそのまま写真製版して印刷しているように思える。ぼってり見えるのはそのせいではないか。紙型も尽きて、版を起こせなくなり、さりとして新たに版を組み直して起こそうにも、活版印刷は過去のもとなった。いまさら書体を変えてあえて新版でというわけにも行かず、同じ活字のままの刷で、という理由ではなかろうか。もちろん、これは邪推の域を出ない見当違いかもしれない。

オフセット印刷は平版印刷の一種だが、その他の方式としてヘクトグラフなるものがある。ロシアあるいはドイツで考案されたと伝わるが、蒟蒻版はその日本独自の方式で、夏目漱石の『坊ちゃん』

にも、狸が会議で刷り物を配るシーンで登場する。ゼラチンを使ったふにやふにやした柔らかい版から刷り出すので、陶器などの曲面の印刷にも用いられた。ヘクトグラフとは、その名のとおりせいぜい100枚程度しか印刷できない。日本ではゼラチンではなく寒天を使ったので寒天版、あるいは蒟蒻版と呼ばれている。現物を見ないと想像もつかないが、数年前に学研から<紙すき&寒天印刷キット>が発売されたのでご存知の方もいるだろう。同じく学研は大人向けのシリーズで、テキンのキットも発売して大いに受けた。

やがて日本では謄写版が普及し始める。通称ガリ版印刷。ヤスリ状に加工した鉄板上で、ろう紙の原紙に専用の鉄筆でガリガリと文字や図案を書くというか引っ搔いて原版を作る。一種のステンシルと言えようか。その引っ搔いた隙間からインクが謄写されるので、孔版印刷と呼ばれる。エジソンが考案した技術がもとになって発展した技術らしい。

学校で配られるプリント類や、試験の問題用紙や回答用紙、町内会の回覧板、労働組合のチラシ、小規模な同人誌など、みなこのガリ版刷り。音符を書き込める五線紙や簡単な地域ごとの地図の原紙なども市販されて便利に使えた。原紙の限界という制約があるけれど、100枚程度ならなんとかあった。市民のための手軽な印刷手段として長く重宝がられ広まった。その後ゼロックスが登場し、安価になったコピー機が普及してからは衰退したものの、今でも愛好家がいらっしやる。(埜村 太郎)

## 司書の眼 第42回

### —分類から「我慢」まで—

鷹野 祐子

最近の医学研究は、人文社会学との融合が進んでいるようで、当図書室でも宗教学や哲学、心理学の蔵書が多くなってきた。そうなると困るのが分類である。もともと医学図書館には洋書が多いので、米国国立医学図書館分類法 (National Medical Library Classification, NMLC) をしている図書館も多いと思う。NMLC は基礎医学(Q系)と臨床医学(W系)に分かれていて、アメリカ議会図書館分類表(LCC)の手法を基にしており、QとW以外の分野についてはLCCを参照するように指示されている。そうすると、社会学や心理学はLCCになるのだが、こちらの蔵書は日本語の資料が多いので、その分野の語彙に詳しくないとLCCで分類できない。ということで、国内の医学図書館では、洋書医学書はNMLC、その他の資料はNDCというように分類しているところも多いかもしれない。NDCで分類するにしても、細かい分類にすると桁が多すぎるし、NMLCと一部重なるようなテーマはどうするか、など分類作業には迷うことが多い。認知や精神関係ならばNMLCに入れておいた方が使いやすいかもしれない。

医学書院の「シリーズ ケアをひらく」(<https://www.igaku-shoin.co.jp/seriesDetail.do?seriesId=28&kind=series>)などは、医学図書館が手を出しやすいシリーズではないかと思う。パンフレットに『「科学性」「専門性」「主体性」といったことばだけでは語りきれない地点から《ケア》の世界を探ります』とあるように、一見医学書のような顔をしていて、エビデンスによる裏付けされた医学とはちょっと違う内容の資料である。何が違うといわれると困るが、言語が違う気がするのである。もちろんみんな日本語で書かれているのだが、その言語が前提としている土壌が違うのだ。また、シリーズというからには通して読む必要があるとか、収集する必要があるか、と言えばそうとも言えない。当図書室でもシリーズのうち数冊しか所蔵していない。公共図書館には、ぜひ全部そろえていただきたいと思うが、さて、その分類はいかがだろうか。都

立図書館で検索してみると490.9、916、369・・・分類はバラバラ、書架もたぶんバラバラ。医療関係書コーナーにまとまっているものも一部ある。医療関係病記書架にあるものもある。このシリーズは《ケア》の世界をいろいろな角度で見ることができるシリーズなので、一緒に閲覧できないのはかなりもったいないと思う。けれども、それぞれ単行本のテーマを考えると、同じテーマと一緒にいたほうが書架で探しやすい、というのもわかる。

コロナ禍では、各自治体が図書館を閉館してしまったので、予約本の受け渡し以外できなくなった。それで図書館システムから検索して予約をして取りに行く。そうすると、欲しい本しか予約できないのでなかなか読む幅が広がらない。いちいち探すのも面倒なので検索結果に出てきた著者名やシリーズ名のリンクをクリックして著者狩りシリーズ狩りをする。そうすると全く興味のベクトルの違うものも一部手に取ることができた。Amazonなどの「あなたへのおすすめ」も便利だが、「こんなものどうですか」とちょっと目先を変えてくれるような機能も図書館システムにあったらいいなあ、と思った日々であった。先日、開館を開始した図書館に久しぶりにいった。手指消毒、マスク着用、1時間で退出しなさい、本の利用前後の手洗いしてくださいという案内があり、カウンターはビニールで覆われ、係員さんはビニール手袋をしている。いつもの雑談をしてくれるような司書さんはおらず、さっさと「借りて帰ってね」という圧力を感じる。図書館の風景が変わってしまった。

850語でなりたつBasic Englishを学んでいることはいつか書いたように思うが、趣味が高じてコロナの自粛期間から小学生に英語を教えることになった。Basic Englishを基にするGDM英語教授法では、まず一番最初にI, Youを教える。Iだけを教えるのではなく、2つの言葉を一緒に教えることで、「IはYouと比較してのI」ということがスムーズに理解される。同じようにYouはIと比較してYouということがわかる。それから次にSheはHeと比較してSheということを理解する。そして、それはIやYouではないということでI, Youの台の1段上

にのせられる。それから、I でも You でも She でも He でもない It が登場する。このように最小限のあいまいさ、それぞれのステップが他のステップを支えている有機的な順序だてによって英語を教えている。会話文のように、よくあるフレーズの丸暗記ではないので、抽象化思考ができるようになる小学校の高学年からなら無理なく英語を習得することができる教授法なのである。

GDM 英語教授法で最初に出てくる動作語は be 動詞である。Basic English には 16 の基本的な動作語がある。go, come, give get, take, put, make, keep, let, see, say, send, be, do, have, seem。これをみて気がつくだろうか。すべて不規則動詞なのがある。不規則動詞ということは、「よく使う動詞」なので、この動作語に方向語をつけることで他の動詞の役割をすることができる。また他の動詞も -ed や -ing などをつけ名詞や形容詞としてつかうことができる。be 動詞も、多くの人が中学校で最初に教わったときにどうして am, are, is があり、それぞれ主語が違うのか？と疑問に思ったのではないだろうか。GDM 英語教授法のテキストである「English Through Pictures, Book 1」ではまず、I am here. You are there. He is here. She is there. It is here. というような場所をあらわすおおまかな言い方からセンテンスがはじまる。be 動詞の root sense (根源の意味) は「存在する」である。中学校の教科書で I am Kumi. You are Emily. というように最初から物や人の名前をいうパターンの用法を教わってしまうと、I am home. の意味を混乱してしまうのも無理はない。

### Do the hokey pokey

新型コロナウイルス COVID-19 の流行後、いわゆるコロナ禍では、いち早くコロナに関する絵本が出版された。「I fight against Covid-19 コロナとたたかう ぼく」(塚本やすし著, 2020, ニコモ) は、英語と日本語の併記になっている。おとうさんが「コロナと たたかうのは てを あらい うがいを して マスクを すること そして そとには でない が まんの せいかつが ひつよう」と教えてくれ、主人公はゲームにもあき勉強もあまりすすまない状況

に、「がまんを することが コロナと たたかうことなんだ」とお家のお手伝いをしたりします。世界中の人が我慢しているから、我慢することでコロナと戦い、そしてコロナ (Covid-19) がいなくなる、と結んでいる。ここで、「そうだよ、今は我慢しなきゃね」と思うか、もしくは「我慢」について違和感を感じた方もいるかもしれない。では英文の方をみてみよう。「I will be patient to fight against Covid-19. ぼくは がまんを して コロナと たたかう」。日本語で「我慢」とされたところは「patient」となっている。「patient」の意味は「忍耐強い」、語源は L. patiens (忍耐、苦しみに耐える)、名詞になると「患者」で、医学図書館ではおなじみの単語である。禅語で「我慢」というのは、自分の我意「我」と自らを奢り高ぶってしまう「慢心」。「我慢をしなさい」と言われることは、我が強い人間にはとてもつらいことなのである。しかし、そもそも、感染症を防ぐために外出を控え、手洗いをすることは、我慢なのであろうか？

ヒトに感染するコロナウイルスは、ヒトに蔓延している風邪のウイルス 4 種類と、動物から感染する重症肺炎ウイルス 2 種類が知られている (国立感染症研究所 HP より)。Covid-19 に限らず、人類は感染症と戦って生きてきた。長い間の戦いの中で得た知識を利用して、病院では病棟の中でも特に感染症を扱う病室を特別に作った。感染症病棟には、出入りをするための準備をする前室があり、汚染された空気が外に漏れないように陰圧にされた個室である。患者も看護をするものもお互いに感染しあわないようにする工夫がある。もちろん空室のことも多いので、他の病気の患者が入院していたりするが、感染症病棟は一般病棟よりもコストがかかるため、病院の経営改善を目的に不採算の感染症病棟を減らす傾向にある。実際に財政難により感染症病棟を減らしていた国は、今回の Covid-19 で対策が遅れたくさんの二次感染を起こしてしまったという。感染症は自分が我慢していれば、という問題ではない。けれども英語でいう「I will be patient」、忍耐強く苦しみに耐え、対応を準備しておくということなら、できるかもしれない。

(たかの ゆうこ：医学系研究所図書室)

# 大学教員ノート 第4回

## —下手に書きなさい—

石川 敬史

ウィズコロナ、ポストコロナ、新しい生活様式、ピンチをチャンスに——私たちが日々接する記号ではあるが、どうも何か制約され、束縛されていると感じてしまうのは私だけだろうか……。息苦しい事務的なオンライン会議が手帳を埋めていく。機械は私たちが進む道が無邪気に定めていく。モニター画面の記号に迫られつつ、じっくりと考える時間が喪失されていく。機械を使わない人とは疎遠になっていく……。これまで積み重ねた何を失い、そして今、何を得ているのか。…… (略) ……

\*

パシフィコ横浜にて毎年開催される図書館業界の学園祭「図書館総合展」。タブロイド判の本年度開催案内に寄稿してしまった小心な文章である。数多くの熱い関係者のお力により歩み続けた学園祭は2020年度で22回をむかえた。もちろん歩みが途切れることなく、本年度も事務局・運営委員の方々のご尽力により「ONLINE」開催へ。Webページには数々のフォーラム、ブース、ポスター発表が豊かに並んでいる。出展される方々の体温がモニター画面から伝わる。

\*

自由で多様でにぎやかな「いつもの」図書館総合展に交わると、自由で多様でにぎやかな「いつもの」風を肌で感じるかも。図書館とは何か——ここにヒントが隠されているような気がする。

\*

情報システムや電子資料に関わる事業者の皆様の出展を失念して綴ってしまい、文字通り「汗顔の至り」である。が、最後にこのように刻ませていただいた。そう、「いつもの」風、「いつもの」生活——確かあの時はまだまだ冷たい風が残る3月の下旬であった。暑い暑い夏が過ぎ去って朝晩と冷えるようになった11月の今から、これまでの時間を遡ると、普段着の生活が喪失したことを改めて痛感する。

\*

卒業式の中止、さらには4年生企画による学科卒業パーティーの中止は、学生一人ひとりの涙をじっくり見つめて「おめでとう」を伝え、次なる道へと一歩進む彼女らの背中を押す「いつもの」機会を失った。唯一できたことは、静まり返った学内にて、緑の芝生と青い空を背景に広がる桜の写真を送信したことであろうか。中国からの留学生2名も含め石川研究室のゼミ生8名——何年かかっても、いつか必ず全員で再び会える日にたどり着くことを願っている。

\*

入学式を中止とするメールも届いた。1年生の担任——「いつもの」期待と不安が交錯する33名の「高校4年生」と4月に対面することはできなかった。新学期も重なり大学が発信する暴風のようなメール——私は勝手にこの時のことを「メール禍」と称している——に立ち向かう時間が続き、日々が束縛された。しかし、「電話」の向こう側には「大学1年生」として実にたくましい学生が存在した。空から突然降ってきた高校の一斉休校、簡略化されてしまった卒業式、友人らとのあつという間の別れ、大学での入学式の中止、新しい友人との出会いの場である新入生オリエンテーションの中止、学内情報システムへの地道に孤独な登録・設定、履修ガイダンスの視聴、そして「メール禍」——受話器からは悩みながらも、「大学生」として芽生えた自覚と自ら前に進む意志を持つ一人ひとりの「コロナ世代」の希望の声を聞くことができた。

\*

Zoom——語尾を上げるのか下げるのか、わからず、語尾を上げて読みたくない、と思いつつも——前期授業期間の全科目をオンラインで開講する通知がメールでポンと届いた。教室で「いつもの」授業はできない。配信された数々のマニュアル、他大学の状況、初心者向けに解説するWebサイト(YouTube)、カメラ・マイクなど機材の準備、複雑なパソコンの設定、背景を隠すカーテンの調整、

そして授業・教材の準備——オンライン授業を行う決意をするまでに3～4日という時間はかかったであろうか——「教員」も自身の自覚を再認識し、自ら前に進む意志を持った。学生も教員も孤独で長い長いたたかひの日々に身を置くこととなる。

＊

教室で学生に会わずとも、時を共有するオンライン授業——正確に時を刻む「時間メディア」（竹山昭子『ラジオの時間』世界思想社／2002）であろうか。ラジオ体操、そろばん、NHK英会話入門、大学受験ラジオ講座（通称「ラ講」）……（かつて聴いた番組の一部であるが）……昔も今もラジオは私たちの「いつもの」生活リズムと時間軸を形成している。それと同時に、互いの顔が見えない多くのリスナーが同時刻にラジオを聴くという「時の共有」をも意味していた。学生にとってオンライン授業とは、春から夏にかけてのある一定の時間軸であり、多くの学生と時を共有したメディアであったと綺麗に論評できるかもしれない。

＊

- ・興味を持ちやすいように雑談から授業内容に入っていたのが楽しく集中できた。
- ・話が面白く、記憶に残りやすい。
- ・毎回楽しそうに図書館や卒業生の話をしていて、悪い気持ちになることは一切なくとても楽しい授業でした。
- ・ただ授業を受けるのではなく、さまざまな資料を見れたり、投票やコメントを投稿してみんなで見たりすることがとてもいいと思いました。

＊

ミュート、チャット機能、待機室、承認、画面共有、ミーティングID——聞き慣れない用語とわからない機能に格闘しながら試行錯誤を重ねて授業と向き合った。猫背で足の長い私は（笑）——椅子に座りながらの授業進行であるため——身体的に違和感があり続けた。黒いタイトルに学生の名前が均等に並ぶモニターと向き合いながら学生に語りかけ続けた授業は、考える時間、すなわち沈黙の時間をつくるのが怖く、「いつもの」授業ではなかつ

た。学生の「いつもの」表情をみることができず、モニター上に存在する自分の情けない表情と対面し続けていた。授業が終えると、緊張と不安の渦から脱出し、机のういで「今日は本当にこれでよかったのか……」とつぶやく日々。こんな状況下でも学生へ授業アンケートが配布（正確には配信）された——学生の自由記述欄にはコメントが数多く寄せられ、授業とは学生とともにつくられていくことを改めて痛感した瞬間であった。

＊

メディア社会はそれがどんな技術によって進化させられようと、それによって現実世界そのものを変えるわけではない。技術が作り出すのはあくまで可能性である。

＊

国際動向も踏まえメディア社会を長年にわたり研究している坂本旬は、技術主義を乗り越え、民主主義と人権のために変革する社会的な力が「メディア情報リテラシー」であると指摘する（『メディア情報教育学』法政大学出版局／2014）。国内外を含め、社会的困難を生きる児童・生徒・学生の学びに、場所や境界を越えるオンラインの授業は大きな可能性を秘めている。万能のようにみえる与えられた機械の背中を磁石のように無邪気に追い続けるのではなく、オンラインによる学びを通して、立ち止まる勇気や、得たもの、失ったものを誠実に考えていくことが「いつもの」授業であり、「いつもの」生活であろう。

＊

下手な字でも他人への思いやりの文字は美しい。

＊

「下手に書きなさい」——「ふだん記運動」を始めた橋本義夫の言葉である（『書いて花咲く哲学』樺出版／1977）。「文は万人が使える道具」であり「歴史は英雄だけのものではない」。前期授業中、この一文が頭の中に刻まれていた。時流に乗って作法や批評に依存するのではなく、顔の見えない一人ひとりを慮る姿勢を忘れてはならないことに気がつく。（いしかわ たかし：十文字学園女子大学）

# なぜ「BLの教科書」が要るのか？

## 四竈 佑介

「あの有斐閣からBL!？」「攻めすぎ!」などというお言葉を、刊行以来SNSをはじめ方々から頂戴しており、反響の大きさ自体には少々驚いているものの、その方向性自体は不遜ながら当初のもくろみどおりであった。堅実さを売りにする学術出版社とはいえ、つねに「受け」身だけで愛され続けることは難しく、ときには「攻め」の姿勢を見せていくのも出版乱世を生き抜くうえでは重要なことである。

かといって、むやみやたらと見知らぬ土地に攻め入ったとか、何も考えずに闇の中で鉄砲を撃ちまくった、とかいうわけではもちろんなく、茂みの中に結ぶべくして結んだ果実のありかを知り、時宜を得てどうにか射抜くことができた、というような感触が正しい。現代の出版界でBLというジャンルが育っており、その現象それ自体について（つまり自分自身について）知りたいている読者がいること、さらにその欲求に応える本がまだ出ていないこと、そうしたことは企画以前から肌感覚で知っていた。そこに、本書の著者たちから出版に向けた企画の相談をいただいたのである。

そのときの「相談」の要点は、ウェブサイトでも読める「はじめに」に詳しいが、私なりに短くいうと、BLの読者は「なぜ、自分たちはBLを読むのか」という問いについて考えざるをえず、そしてその問いに答えるべくして多くの研究者が蓄積を増やしてきた、とのことであった。

おもしろい問いではないか。この問いかけはもちろんBLに独特なものだけでも、拡がりも見込める。このご時世に読書を愛好する者なら「なぜ、自分は本を読むのか」と、一度は立ち止まって考えたことがあるだろう。自分一人でそう問うて、何か答えるとすれば、そこにどんな根拠があるだろうか。

ところで、この種の素朴なセンス・オブ・ワンダー

に、社会学的に応えるには「なぜ、その問いについて考えざるをえないのか」という、ある種のメタ目線での問いかけにも同時に答えることが求められる。とすると、ともすればその問いかけは無限後退を招きかねず、足場がおぼつかない。

私は、日ごろはきわめて地味な、大学生向けの社会学の教科書を作って糊口を凌いでいる。今回の本だって、わかりやすいように「教科書」とみずから名乗っているとおり、学生や研究者の卵に向けて編まれたものである。では、そんな「地味」な本が、先の問いかけに答えることに、どう寄与するのか。

いま「わかりやすい」ように、と言葉にしたのには一応意味があって、「教科書」がある、というのは学問にとって重要なことである。蓄積がなければ教科書は作れないが、逆も然り。先達の煩悶・格闘の蓄積もアクセスできなければ意味がない。けれども、まずわかりやすく分野の定番教科書が学術出版社から出ていれば、とりあえず「なぜそんなことを問うの?」という問いかけには、自分だけの力で答えずに済む。「そう問うことが学問になっているからです」と言えるからである。

最後まで不遜な調子に聞こえかねず、またこの話はある面で本質を外していると自覚する。私がここでお伝えしたのはいわば表面の話であり、紐解けばすぐにわかるが、この本の内側にはジェンダーやフェミニズムについての議論が中心にあり、先の問いにもその方面から答えることが正当である。ただ、限られた紙幅を言い訳に表面上の話と開き直るなら、男性である私が、この企画を進めたことには一定の意義があったように思う。何度も立ち戻ってしまうが、先の問いは、社会学として考えるなら、BLをおもに読まれる女性たちだけの問いではなく、われわれが考えるべき問いであるはずだからである。（ししま ゆうすけ:有斐閣



『BLの教科書』堀あきこ・守如子 編/A 5版並製/306頁/定価 2640円/2020年/有斐閣